東京 IPO　特別コラム

２０２３年3月２９日　Vol.２１２

佳境に入った3月ＩＰＯ

３月後半になり既に桜の花が散り始めた令和５年の春。株式相場は欧米での金融システム不安による先行き不透明感からやや頭重い展開が続き、春を先取りした相場には多少反省の気運も見られます。３月３０日の配当落ち後の展開に関心が寄せられるとともに既に次年度決算がどうなるのかに関心が向かっている状況です。米国では３月の政策金利引き上げ幅が０．２５％に落ち着き、一連の金融システム不安にも沈静化の動きが感じられます。まだ物価高が収拾していない日本では春闘での賃上げが軒並みに高くなる状況となり企業業績への影響が気になるところですが、円安が多少落ち着きを見せているほか原油価格も安値圏で推移しているおりさほどネガティブな要因にはならないものと見られます。

こうした相場環境の下で、3月のＩＰＯ市場には一挙に１５銘柄が登場することになり、既に２８日までにＩＴ機器メンテ事業のＳＨＩＮＫＯ（７１２０・Ｓ）やモバイルアプリ事業を展開するアイビス（９３４３・Ｇ）、中高年齢の女性向け雑誌や通販事業を展開するハルメクＨＤ（７１１９・Ｇ）など８銘柄の取引が開始されています。ここから月末にかけては住信ＳＢＩネット銀行や障碍者福祉サービスのココルポート（９３４６・Ｇ）など７銘柄がＩＰＯの予定で３月のＩＰＯは佳境に入ってきました。

４月についても１１銘柄のＩＰＯが予定されており、その中には前回ご紹介しました月面開発事業を展開するｉｓｐａｃｅ（９３４８）が含まれるほか楽天グループの金融事業の中核的企業でネットバンクを展開する楽天銀行（５８３８）や投信運用のレオス・キャピタルワークス（７３３０）が話題を集めそうです。このように３－４月のＩＰＯ銘柄は現在のところ合計で２６銘柄になる予定ですが、相場の波乱を横目にキタムラＨＤとノイルイミューン・バイオテックが上場を取りやめるに至っており、直近の市場の混乱が影響したと言えそうです。ただ、これまでのところ3月ＩＰＯ銘柄で公開価格を初値が下回ったという銘柄はなく、初値が高過ぎてその後反落する銘柄は出ていますが、ほぼ順調に消化されていると言えます。昨年の４月までのＩＰＯ銘柄数は２４銘柄でしたので、２８銘柄のＩＰＯが予定されている今年の方が上回っていることになります。問題はそのＩＰＯ銘柄の内容ですが、ＤＸ関連３社（Ａｒｅｎｔ、モンスターラボＨＤ、Ｆｕｓｉｃ）のほかカバー（５２５３・Ｇ）のようなＶチューバー関連、Ｒｉｄｇｅ－ｉ（５５７２・Ｇ）のようなＡＩ関連銘柄、前述の宇宙関連銘柄など話題性のある銘柄が含まれていますのでかなり賑やかな展開になりそうです。昨年も押しなべてＩＰＯ後の調整が見られた点を踏まえると今年もＩＰＯ後の波乱相場は想定されますが、一方ではビジネスの希少性や先駆性への評価は高まりを見せ、全体相場が頭重い展開になればなるほどむしろ人気化する銘柄も登場するものと期待されます。

（東京ＩＰＯコラムニスト　松尾範久）